

イベント型の子育て支援活動とその成果のフィードバックを通じた 「親子が関わる機会」を増やす試み

中部学院大学短期大学部 幼児教育学科 2年 子ども家庭支援コース 有川ゼミ

1. 目的

地域の子どもたちに遊び場・遊びの機会を提供するために、また、親子で一緒に楽しむ機会を提供するために、私たちは2011年度から「各務原市川島ライフデザインセンター前期長期講座『遊びの基地』」をゼミナール活動として継続的に担当してきた。特に2013年度からは本事業による補助を受けながら明確なテーマを掲げて実践を行い、親子で楽しむために必要なポイントを少しずつ明らかにすることができたため、本講座の活動中には親子が一緒に楽しむ姿が多数見られるようになった。その一方で、各家庭では親子が関わる機会が十分に増えていかないことが近年の課題となっていた。私たちが実施しているイベント型の子育て支援活動の場合、年間6回という少ない回数であるため保護者に提供できる内容には限界がある。これを何らかの方法にて補うことができれば、各家庭における「親子が関わる機会」を増やすことができるのではないかと考えた。

そこで今年度は、講座内において各家庭でも親子で一緒に楽しむことができる「あそび内容」と「あそび方」を提供するとともに、講座外においてはホームページを用いた「親子あそび内容」の情報提供を行うことで、各家庭で「親子が関わる機会」が増えるか否かを検証し、子育て支援活動を各家庭へと波及させるポイントを検討することを目的とした。

2. 方法

実施した講座について:

平成28年度各務原市川島ライフデザインセンター前期長期講座「遊びの基地」講座（開催回数：6回、開催時間：土曜日10:00～11:30）にて、受講者35名（3歳～小学2年生の子ども）とその保護者に対し、昨年度までと同様に、私たち学生が主体となってあそびのブースを企画し、展開した。

実施した講座内容について:

昨年度までの成果を踏まえ、展開するあそびのブース数は3つとし、それぞれが20分程度で完結する内容を基本とした。また、保護者が興味を持つことができる内容で、かつ、親子が関わりあいながら実施できるあそびを考案し、「あそび方（≡子どもとの関わり方）」を含めた内容を提供した。さらに、各家庭でも同じあそびが実施できるように、詳細な「説明書（解説書含む）」の作成・提供に力を入れた。

親子あそび内容の情報提供について:

本講座のホームページを開設し（「あそびすとと遊ぶ！遊びの基地」講座 親子あそびのライブラリー）、過去5年間の本講座の実施内容から厳選したあそびの説明書と、本年度に実施したあそび内容の修正版の説明書を公開した。

評価について:

本活動による成果の評価は、保護者と子どもの関わり方の行動観察と、各回ならびに最終回に実施した保護者アンケートの分析に基づいて行った。

3. 結果および考察

a. 実施した講座内容について

第3回目に実施した「自分だけのペットボトル水族館をつくろう！」は浮沈子を応用した工作であり、

保護者がペットボトルを握って動かす魚を子どもたちは不思議そうに眺め、その動きに夢中になっていた。作り方の詳細な説明書とともに浮沈子の原理の解説書も提供しており、保護者も納得できる内容となった。また、魚を輪に通したり、フックを魚に付けて“釣り”を楽しむようなゲーム性を持たせたサンプルを親子の近くに置いたことで、家庭でもう一度作る際のイメージが膨らんだ様子も見受けられた。この内容は、ある小学校の教諭をしている保護者から「ぜひ授業で使わせて欲しい」との申し出があったほど好評だった。

第5回目に実施した「親子で対決！スイスイボート！」は厚紙とビニール袋だけでホバークラフトのように床を滑って進む製作物で、簡単な工作でありながらも見事に滑るその原理に、保護者から「これ、すごいですね！」と驚きの声が上がっていた。また、このボートを使ったゲーム（カーリングゲームや的あてゲーム等）に親子が夢中になった。ゲームで得点するごとにシールを貼っていく形式にしたことも、ゲームが盛り上がる要因となった。

最終回のアンケート結果から、昨年度と比較して、講座内にて親子で一緒にあそびを楽しむことができた割合がわずかに増加する傾向が見られ（表1）、講座以外（各家庭）にて親子と一緒に活動する機会も増加する傾向が見られた（表2）。また、本講座で展開したあそびを家庭でも行った割合は88.2%（15家族）であったことから、展開したあそびに対して保護者に興味を持ってもらえたことが窺えた。

表1 この講座で、親子で一緒にあそびを楽しむことができたか

	2015年度 (n=16)	2016年度 (n=17)
楽しめた	68.8 (11)	82.4 (14)
ある程度楽しめた	25.0 (4)	17.6 (3)
どちらとも言えない	6.3 (1)	- (0)
あまり楽しめなかった	- (0)	- (0)
全く楽しめなかった	- (0)	- (0)

値はパーセンテージ、カッコ内は実数を示す

表2 この講座以外で、親子で何かを一緒に楽しむ機会が増えたか

	2015年度 (n=16)	2016年度 (n=17)
増えた	12.5 (2)	41.2 (7)
ある程度増えた	62.5 (10)	41.2 (7)
どちらとも言えない	25.0 (4)	17.6 (3)
あまり増えなかった	- (0)	- (0)
全く増えなかった	- (0)	- (0)

値はパーセンテージ、カッコ内は実数を示す

b. 親子あそび内容の情報提供について

第2回目に実施した「ゲコゲコガエルで合奏しよう！」は、曲がるストローの蛇腹部分が紙コップに擦れることで“ゲコゲコ”と音が出る工作だった。講座実施後に制作物の形を工夫し、紙コップをカエルの体に見立てた修正版の説明書をホームページにて公開した。また、過去に提供したあそびの中からいくつかの説明書を公開した。しかし、最終回のアンケートの結果から、ホームページを見た参加者は17.6%（3家族）とごく少数であり、ホームページ上で「親子あそび内容」を公開する試みは、表2に示した各家庭での親子が関わる機会の増加に関与したとは考えにくい。よって、ホームページを用いて一方的に情報を公開するよりも、本講座にて実際に子どもと楽しい時間を共有してもらうことが、各家庭での親子あそびへと繋がっていくと考えられた。つまり、保護者に対して親子が触れ合う「場」を提供することが有効だと考えられた。

4. まとめ・本成果を踏まえた提案

今年度の取り組みでは、各家庭における「親子が関わる機会」を増やすことを目指して活動した結果、その情報の一方的な公開だけでは効果は薄く、保護者に「あそび方（≡子どもとの関わり方）」を実感してもらうための「場」を提供することが有効だと考えられた。地域の子どもたちに遊び場を提供するために始まった本講座だが、親子が関わる機会を増やすためにも同じものが必要となると言えそうである。よって、子育て支援活動を各家庭へと波及させるポイントとしては、一方的に情報の公開を行うのではなく、“親子でじっくりと関わることができる「場」を提供すること”と、“実際に子どもと一緒に楽しんでもらう中で、提供した「あそび内容」「あそび方」に興味を持ってもらうこと”が必要だと考えられた。